2016年8月発行（年3回　3, 8, 11月発行）通巻118号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2016年8月
118号

目次

・保育事業25年目の試み②　1頁
・村人に支えられて　2頁
・「みんなで布チョッキン」子どもたちの笑顔のために　4頁

ニァト先生とスレイモム先生が教えてくれた折り紙のかぶとに、子どもたちは大満足。

1

保育事業26年目の試み②

前号（2016年3月発行）では、バンキアン保育所、プレイタトウ保育所を卒園し、幼稚園教諭養成学校（以下、養成学校）を修了したビアスナ・ソピエクニァトと、パ・スレイモムをご紹介しました。2名は、2016年4月より当会カンボジア事務所（CYK）で保育アシスタントとして働きながら、保育専門家を目指しています。今号では、スレイモムのインタビューと、2人の新職員の仕事への思いをご紹介します。

インタビュー：保育アシスタント・パ・スレイモム

保育所での思い出：私は18年前にプレイタトウ保育所を卒園しました。その頃、プレイタトウ保育所は村で唯一の保育施設で、そこに通えた私は本当にラッキーでした。保育所ではお昼寝が嫌いでなかなか寝なかったので先生に叱られたこともありました。けれど、保育所で大勢の友だちや先生に囲まれて過ごした楽しい時間はとても貴重だったと、今心から思います。保育所で一緒に遊んだ友だちは、大学進学や工場勤務、結婚など進路は様々ですが、今でも仲良しです。村にいる時はお互いの家を行き来して、結婚式がある時には一緒に参加して、延々とおしゃべりをします。

奨学金に応募した理由：小さい頃から先生になりたい、教育関係の仕事をしたいと思っていました。しかし、大学の学費を払えなかったので縫製工場で2年ほど働きました。もう自分の夢を叶えることはできないと思っていた時に、保育所での奨学生募集の話を聞いてすぐに申し込みました。CYKや奨学金を出して下さった方々に心から感謝しています。

養成学校でのこと：私はプノンペンに親戚がいなかったので、養成学校に通った2年間は寮に入っていました。寮生活は友人がたくさんいて楽しかったのですが、大変なこともありました。10日に一回ある警備当番は、3人グループに分かれ、一晩中交代で宿舎の見回りをします。朝は4時にベルが鳴って起こされてしまうので、当番をした翌朝はとても辛かったです。それに大人数での生活なので、水浴びも大変でした。貯水タンクが小さいので、一度にたくさんの人が水浴びをすると水が出なくなってしまい、長時間待ったこともありました。けれど、学校にも通えて、子どもの教育に携わるという夢もかなえられて本当に嬉しいです。

CYKでの仕事について・パ・スレイモム

CYKでは、保育アドバイザーで指導係のアルンさんに見てもらいながら、教材の作成や授業計画の立案、モニタリングの報告書作りなど、様々な仕事に挑戦しています。まだパソコン操作が苦手なので報告書を作るのが一番大変で、他の職員に助けてもらいながら、取り組んでいます。毎月の村の幼稚園のモニタリングは、私たちの大切な仕事のひとつです。村に行った時にはアルンさんが絵本を読み聞かせたり、授業をしたりするのですが、その時の子どもたちはみんな笑顔で、私もそんな先生になりたいといつも思います。アルンさんのように子どもの話をよく聞いて、たくさん褒めてあげたい、そして子どもが発言したら、皆で拍手をしてあげて勇気を持てるようにし

てあげたい、そう思いながら、子どもたちと触れ合っています。村を訪れた時の子どもたちの楽しそうな姿や、子どもたちから「幼稚園が楽しい。友だちができた。文字が分かるよ」、という声を聞くと、やりがいを感じます。

将来は、仕事を通して学んだことを村の先生や子どもたちに伝えて、カンボジアの幼児教育をより良くしたいです。そして、多くの子どもたちが学び、良い人材として育ってほしいと願います。

・ビスアナ・ソピエクニァト

CYK に勤務して 4 ヶ月。働いてみて難しいと感じるのは、村の幼稚園にモニタリングに行った際の子どもとのコミュニケーションです。子どもたちと毎日会っている村の先生と違い、私は月に 1~2 回しか会わないので、お互いに緊張してぎこちない雰囲気になってしまうことも多いのです。

子どもたちに楽しんでもらうために、新しいゲームや遊びを探すのも私たちの仕事です。この間は、インターネットの動画で日本の「かぶと」の折り方を見つけて、チュティール村の幼稚園の子どもたちに教えてあげました。子どもたちはかぶとが完成するととても満足気で、自分の方がきれいに折れた！と自慢し合っている子もいました。

幼稚園に通っている子どもは、そうでない子どもよりも友だちと仲良くできるし、文字や数字を理解していて、言葉使いも丁寧です。CYK が村の幼稚園を開設することで、今までは幼稚園に通えなかった子どもたちにも教育を受けるチャンスを与えることができるので嬉しいですし、大切な仕事だと思っています。

いよいよ、当会が 36 年間の活動を通して培った知識やノウハウの引き継ぎが始まりました。バンキアン・プレイタトウ保育所で幼児期を温かく見守られ、そして幼児教育を専門に学んだ若い二人に、これまでの会の取組みや経験が託されようとしています。CYR 発足以来の目標である「カンボジアの人々による活動」へ新たな一歩を踏み出しています。

写真 1 枚目：保育アドバイザー・アルンと、新しく作成する教材について話し合う。CYK の教材は村にある材料で修復できて、保育者が使いやすいものであることが第一条件。（写真右：アルン、写真左：ニェト）

2 枚目：所長のスレイから、村の幼稚園の収支を管理するための表の見方、作り方を教わる。「パソコンはまだまだ勉強中」と語る二人。（写真左：スレイモム、中：ニェト、右：スレイ）

3 枚目：モニタリング時には、幼稚園や子どもたちの様子を評価して記録。CYK・CYR 両事務所で共有する大切な資料となる。

2 村人に支えられて

「村人が運営できる幼稚園を、より広い範囲に広げよう」

このテーマのもと、2011 年 10 月、CYR/CYK は「村の幼稚園」を、カンダール州に開設しました。それから 5 年、ついにプラサート村は自主運営へ移行しました。幼稚園開設から運営、そして自主運営達成までには、日本からのご支援とプラサート村住民の協力がありました。

チョム・ポーさん（68 歳）は、1 年前にプラサート村へ引っ越して以来、村の事業に協力を続けています。6 月には、子どもたちがより衛生的な環境で気持ちよく勉強できるようにと、教室に水が入り込まないよう、盛り土をする工事にも協力をしました。

ポーさんの話―幼少期からこれまで

私は 5 人兄弟の 3 番目の子どもとして、プノンペン市クラントノン村で生まれました。母親は私が 4 歳の時に亡くなり、父親は農業と砂糖作りをしていました。父はよくお酒を飲み、仕事をしませんでした。生活は苦しく、食べ物も満足になかったので、小学校 1 年生で学校をやめました。それでも勉強を続けたかった私は出家をして、お寺で 3 年間学びました。しかし、父は相変わらず仕事をせず、きょうだいは辛い生活を続けていました。そんなきょうだいたちを見ていられず、父の代わりにヤシの花から砂糖を作る仕事を始め、数年後にはロンノル政権の軍人になりました。

軍人になって 3 ヶ月経った頃、ポ

村の環境がよくなったら気持ちがいいし、みんなも喜んでくれるので、これからも必要なところに協力していきたい」、と話すポーさん。

ルポト派が政権を握り、私はプノンペンからカンダール州の農村に強制移住させられ、そこで妻と出会いました。彼女は私より５歳年上、色白でしたが痩せぎすであまり良い印象はありませんでしたが、強制結婚だったため逃げられず、夫婦になりました。その後、プラサート村での砂糖作りを命じられ、家族で移住しました。当時、私がロンノル側の軍人であったことはポルポト兵にも報告されていたようでした。しかし、彼らにとって砂糖作りはとても重要な仕事でしたし、私は一生懸命に働いていたのでポルポト兵に信用され、殺されずに済みました。以前の職業を偽って報告した人たちは皆、殺されたと聞きます。

内戦終結後、私たち家族はプノンペンに戻りました。市内で家を持ったのですが物はなにもなく、お米を炊くだけでも川から水を汲んでこなければなりません。そこで、もっと広い土地と仕事を得ようと、プノンペン郊外の村へと引っ越しました。そこでは、人々が自由に広い土地を手に入れ、開墾することができたのです。それから何年も農業をしながら、土地の売買を繰り返して収入を得ました。今はプノンペンの土地は全て売り払い、家やアパートの賃貸経営をしながら、妻と２人で暮らしています。そして１年前、もう年だし自分の好きなことをしたいと思い、プラサート村に戻りました。村で土地を買って稲作、野菜を育てています。力仕事が好きなので、空気がきれいなこの村で農業をしながら生活ができて、幸せな毎日です。

村の幼稚園への思い

出家した時に「来世でいい人生を送るためには、現世で徳を積むべきである」と学びました。その時、自分が幼い頃から苦しい生活を送り、学校にも通えないのはきっと前世での行いが悪かったからだと悟りました。それからは自分の来世のために徳を積もうと、できる限り人の役に立つよう行動してきました。生活に余裕のできた今は、仏教儀式に必ず参加しますし、村の社会事業や幼稚園へ寄附もするようにしています。

村に幼稚園ができた事は本当にいいことだと思います。私は、貧困や時代のために勉強したくてもできませんでした。今、子どもたちが自由に学べる場所があるのは嬉しいです。多くの子どもたちが一生懸命勉強して知識を身に着ければ、国も発展していくでしょう。子どもたちにはきちんと勉強して、国の発展に貢献できるような大人になってほしいと思っています。

インタビューを担当した職員は…

ポーさんが村や幼稚園のために、多くの協力をしてくれて、とても嬉しいです。ポーさんが話した通り、私もよく勉強する人が多ければ多いほど、国の発展につながると思います。人は一度学ぶ機会を与えられれば、その時のことは心のどこかに残るものです。今は貧しくても、生活に余裕ができた時に学んだことを思い出し、次の世代の教育にも協力してくれる人がきっと出てくると信じています。ポーさんのように、国にとって役立つことをする人が増えるように、これからもより多くの子どもたちに教育を受ける機会を与えてあげたいです。（CYK 所長　チャン・スレイ）

3 「みんなで布チョッキン」子どもたちの笑顔のために

遊具が不足するカンボジアの幼稚園に人形やボールを届ける「みんなで布チョッキン」は、活動が始まってから10年になりました。布チョッキンは不要になった布を型紙に沿って切り、寄付金とともにカンボジアへ送る活動です。現地の女性たちがその布から遊具をつくり、全国の幼稚園に提供しています。布チョッキン参加者の方によく質問されるのが、ボールや人形の縫製者についてです。CYKが縫製をお願いするのは、幼稚園に通う保護者の中でも、協力金の支払いが難しい保護者たち。毎月の縫い賃は、彼らにとって大切な現金収入です。

2011年に村の幼稚園を開設したタプロム村は、プノンペンから車で約1時間の所にある、小さな農村です。村のいたるところで道路に寝そべる牛やヤギを見ることができ、村人たちが自然とともに暮らしている様子が感じられます。一方で、村人のほとんどは自分の土地を持つことができず、また土地代を払う経済的余裕もないため、川の土手に小屋のような家を建てて暮らしています。漁や稲作、縫製工場で勤務をして収入を得ていますが、十分とは言えず、貧しい暮らしを強いられています。

タプロム村の縫製者の一人、カー・ソックナーさんは3人の子どもを持つお母さんです。1番上の子どもは村の幼稚園を卒園、小学生になりました。2番目の子どもは現在、幼稚園の園児で、時々、弟を連れて登園します。

新しく壁をつけ、少しだけ生活が楽になった、と笑うソックナーさん。布チョッキンは農村の女性たちの収入を支えています。

月10個のボールを縫製するソックナーさんは次のように語ります。

「以前は夫が、プノンペンでバイクタクシーの運転をして生活していました。しかし、都市では生活費がかさむので、現在は村で漁をしています。生活はとても苦しいです。けれど、縫製の仕事を始めてから、以前は払えなかった幼稚園への協力金はもちろん、必要な日用品も買えるようになりました。また、家に新しく壁もつけました。これからも家族のためにボールの縫製を続けたいです。」

以前よりも生活は改善されたものの、貧しいことに代わりはありません。ソックナーさんの最近の悩みは、家の屋根が古くなり、雨漏りがひどいことです。夜に、南国（東南アジア）特有の激しい雨が降ると眠れず、子どもたちに毛布をかぶせて濡れないようにしています。

ソックナーさんは、より多くのボールを縫って、収入を増やしたいという希望があります。しかし、当会は、縫製者全員に安定して仕事を供給するため、毎月決まった数の仕事をお願いするという方針です。1個でも多くのボール縫製をお願いするため、日本の皆さんのご協力が不可欠です。ぜひ、布チョッキンを通して、村の女性たち、そして子どもたちの生活改善のため、温かいご支援をお願いいたします。

CYR情報

2017年カレンダー「カンボジアの子どもたち」

今年も、撮影　高橋智史氏、レイアウト　熊谷正氏のご協力で、カレンダーを製作中です。2017年をカンボジアの子どもたちの笑顔とともに、過ごしてみませんか。

カレンダーの販売開始は9月下旬を予定していますが、予約も受け付けております。ぜひ、お買い求めください。

2016年12月22日（木）18:00～

グレゴリオ聖歌によるクリスマス日中のミサと小コンサート
“幼い難民を考える会”のために

主催　CANTATE DOMINO
後援　JCDA 日本合唱指揮者協会
場所　聖心女子大学聖堂　渋谷区広尾4-3-1
　　地下鉄日比谷線　広尾駅2番出口　徒歩5分

子どもたちの明日 118号

発行日：2016年8月31日　発行者：廣戸 直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会
東京事務所（CYR）
〒110-0016　東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A
TEL: 03-6803-2015　FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp　URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所（CYK）
#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849　FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh　URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会（CYR）は認定NPO法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。